

昭和二十八年四月十五日発行（毎月一面・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

（通第4十九号）

目

仏陀誕生の意義……………花田正夫（2）

大無量壽經講話……………福島政雄（7）

遺稿「願生抄」……………清水凡秀（11）

次

慈光

第五卷 第四號

佛陀誕生の意

花田正夫

花咲き鳥歌ふ四月は、佛陀降誕の聖月であります。世界中の佛教徒は老若男女を問はず、右手に天を指し左手に地を指された誕生佛をお祭りして、香華を手向け、讃歌を奏して、隨所に佛陀の御誕生を祝ぐことでがります。私も幼い日、祖父に連れられて花祭に参り、桜の満開の御堂で甘茶の接待をうけた懐しい思出がります。先年も県下の藤川村の花祭に招かれました時、静かに讃佛歌の吹奏せられる中に、童男童女が一人一人華籠を持つて、うやうやしく生花を佛前にお供へしてある姿に、覚えず感涙を催しました。

長い冬が跡かたもなく消えて、陽春の再びめぐり来つて、病軀ながらこの聖月を迎へ得まして感慨のまことに深いものがあります。それにつけましても、佛伝中の最も古いものとされて居りますジャータカに、次の様に佛陀の降誕を讀へてあります。

マヤ夫人は夢に、四天王にともなはれて、雪山の上に遊

の瑞相でありますが、佛陀三十五歳の降魔成道の模様も殆んどこれと同じ様に讀へられてあります。佛陀が六年の苦行を捨てられて菩提樹下の正覺の座におつきになると、御身から光明を放たれ、黒魔はその正体をあらはして荒れ狂ふのであります。が、黒魔の正体を底の底まで照らるさ佛陀の御智慧と、荒れ狂ふ黒魔への限りない佛陀の御慈悲によつて、黒魔はおのづと靜まつて、かへつて佛座を莊嚴するといふ風に転じ、遂に成道遊されるのであります。その有様をジャータカに次の様に大略示されてあります。

佛陀がいよいよ正覺を御成就になつたのは、夕日がなほ地平線を照して居た頃であります。

この時三千大千界世は、にはかに光明が輝き、天地によろこびの声が満ちました。さうしますとたちまち東の涯から大小種々な旗幟が現はれまして、見る間に西の涯に沈み、また西の涯から現はれて東の涯に入り、南から現はれて北に、北から現はれて南に隠れました。

斯様にいたしまして此等の旗幟は、終に八方から天の中室に集つて、それから再び大地に消えて了ひました。それから宇宙間のありとあらゆる花は、皆開いて、木の実のなる樹は皆その果実の房で飾られました。

其時、空中からは蓮華が紛々として降り、地上には百合

ばれ、宝の池に浴し、銀の山にのほり、黄金の御堂に入られました。

その時、白象が金の山から降つて、白蓮華をささげ、夫人の床下に三礼して、右の脇から入りました。

この時、もろもろの不思議が現れました。大地はふるひ、百花はことごとく開き、盲者は眼を開き、聾者は声を聞き、啞者は物語り、跪者は歩行し、囚人は解放せられ、地獄の火は自然に消滅しました。馬はいななき、象は優しく歩み、音楽は自然に鳴り、天は明かに晴れ、風は静かに吹き、鳥は高く飛ばず、河は流をとどめ、海の潮は新になり、世界の到るところに蓮華は紛々と降りました。

在胎十月、ルンビニ園にアソカの花実しけり、瑞雲空にかがやき、雜色の蜂、遊禽の群、婉轉として、花の間、枝の上に飛び交ふ時、佛陀は芽出度く誕生遊され、時は正しく四月八日のことでした。

これは佛陀の肉身がマヤ夫人に宿られた時と御誕生の時

の花が、片々として自然にひるがへりました。

やがて大千世界は廻転を始めて、そのすがたは一團の蓮

華が飛び散るやうであり、美妙な一環の花輪のやうであります。

大空は一杯に光明が輝いて、地獄はこの時始めてその暗さを消しました。大海の水はこのとき甘味となり地の底へ減退し、すべての河水はこの時、その流れをとどめました。

盲者はこの時明を得、聾者はこの時声を聞き、跪者はこの時歩行を得、すべての囚人はこの時その鎖からとかれて自由を得ました。

花御堂に飾られた誕生佛に、甘茶をそそぎ、香華を手向け、讃歌を吹奏いたします花祭の行事は、かうした佛伝を中心のかたどられたものであります。

時は彌生、空は靄み、雲雀は高く鳴り、地は新緑に覆はれ、花は笑ひ胡蝶は舞うて居ります。佛陀誕生の瑞相は眼前にそのままの莊嚴さを展けて居ります。

講和と独立の光を浴びた日本の隨所に、盛大な花祭の行事が催され、声を限りに佛陀の降誕を祝ぎ奉ることはうれしく有難い極みであります。この行事は人の子の存する限り、地に春の訪れる限り、永く大切に続けられることで

ありません。

然しこれが單なる形式、お祭りさわぎで終るのであれば、誠に残念なことであります。それでは偉人崇拜、偶像崇拜に終るのであります。今一步進めて、私共の胸中に佛陀の誕生を迎へるといふことが非常に大切なことであります。ジャーダカの佛伝を編集せられた人は、確かにその内心に生々とした佛陀の誕生を体得して居られる。さうでないとこの伝記は誌すことが出来ないと感ずるのであります。

顧みますのに、佛教三千年の歴史は、人々の胸に誕生された佛陀の徳光の歴史であります。それでは佛陀の誕生を我が身に迎へるとはどう云ふことかと申せば、經に「機の度すべきをみそなはして、前なく後なく、三輪等しくおもむいて開導し給ふ」とあります。三輪とは身と口と意の三つであります。佛陀の身心が衆生の心に誕生せられるのであります。佛陀の久遠のいのちが、衆生の身の内、心の底に徹到するのであります。かくて始めてこの降誕の奇瑞が空文字でなく、生きたまこととして同感、隨喜せしめられるのであります。

仏陀降誕の場所

医師は病人の住む所に現れます。大医王であります佛陀は、煩惱に狂うて、生死のはてしないところ、恩愛の絆の

数日前のことであります。桑名の信友、西方寺を訪ねました時、来会されました鬼頭さんの告白は実に傳いことでありました。唯一人の御令息が戦病死せられ、身も心も崩折れ沈むといふ具合で、奥様も亦生き杖を失はれ、口では互に励ましつつ限りない悲歎に御夫婦共に沈まれたのであります。数日すぎた時、奥様は誰も居ない川の方に向つて、御子さんの名を呼ばれつづけ、「お前は何處へ行くのか、もう帰らぬの」と独語をせられるやうになつた。これを聞かれた鬼頭さん的心は身を寸断される思ひで「嘘、家内も氣が狂ふ。自分も狂うて了ふのか」と、はたと行き詰つてはれたのであります。その剣那に「先立つ者は知識」と云ふ言葉がひよつこりと心に浮び、悲歎の中にも御夫婦で聞法せられるやうになり、遂に鬼頭さんの心に深く刻まれたことは「子供のことはどうしてもあきらめられません。これは私共の死のきはまでこの通りであります。たゞ、このあきらめようとしてもあきらめられぬ者を、可哀相である憐れであると、御慈悲の一一杯を注いで下さる、この佛様に救はれてお念佛申して居ります」とのことでもありました。

この鬼頭さんの告白せられる御心の中、恩愛まことに断ち難き中に、佛陀の誕生の瑞相をありありと感じ、尊く聞かせて貰うたことであります。

断ち難い身に影現せられるのであります。

私共は客人を迎へる時、何時も座敷を掃除し、部屋を飾りますので、佛陀を迎へるにも、自分の心を立派にし、煩惱をしづめて迎へねばならぬと思ひ勝であります。されば世間普通の心であります。さうしたゆとりがありますのは未だ自身が頻死の重病人であると気づかないからであります。佛陀はこれを毒矢の簪をもつて説められてあります。即ち毒矢で深傷をうけて、友人に医師を呼んで貰ふ場合に、先づその医師の経験や人柄を問ふと云ふ暇はない一刻も早く医師を迎へ毒矢を抜き、解毒の手当をせねばならない、と訓へられてゐます。

省みますと、はかない人生であります。明日の生命を保証出来る人は一人も居ないのであります。又事毎に善くならう、美しくしようと願ひながら、常に濁し、恒に惡の方へ転落する身であります。この如何ともすることの出来ない、遠く深い罪業の重圧に崩折れて行く他にない、重病人の上にこそ、佛陀はその誕生の姿を現して下さるのであります。泥田の中に蓮華の花は開くと教へられ、惡臭人を狂はす伊蘭の林に栴檀香木の芽は生じて芳香に転ぜしめて下さると承ります。盲人の目となり、瞼者の口となり、跛者の足となつて、その救ひを成就して下さるのが佛陀の大医王としての徳力であります。

大阪に浅野さんといふ方があります。鍼灸の療法をして居られるのであります。浅野さんが兵隊検査の頃、而眼共にそこひとなられ、段々と失明すると宣告せられたのであります。種々苦しまれた拳句、盲啞学校に入り、次で鍼灸を学ばれたのであります。其間の煩悶は一方ならぬものであります。幸にお母さんが篤信な方でありますので、念佛門に深く導かれて、念佛接種の名で呼ばれる様になられたのであります。「念佛申しながら鍼灸をして居りますと、鍼灸より念佛の方がよく効くことがあります。有難いですなあ」とよく言はれて居りました。

又奈良の刑務所に高橋さんと云ふ看守長の方が居られましたが、一人の囚人が何事にも不平不満で暴れると云ふ風であります。或日食事がまづいと云つてつきかへすのであります。高橋さんが自分で多少調味して食物を運んで行かれるとき、汁の椀を高橋さんに投げつけてとあると云ふ始末でありました。其時高橋さんは、ふと自分自身が長い念佛機の心をはね返して居つたことに氣付かれ、囚人を責める心になれなかつたさうであります。このことが機縁となつてその囚人はしきりに教を聞くやうになり、遂には念佛三昧の身と軒じ看守の方々にも今迄のことをわびると云ふやうに

なりました。或日の昼休みに高橋さんが房舎を訪ねられると、釘折れのやうな字で書かれてあるお母さんの手紙を何度か押し戴いてゐるので、其由をきかれると「私が入所以來母が毎月必ず手紙をくれます。然し何時も同じことで、眞面目に勤めて、身体を大切にせよ。期が満ちたら母だけは待つてゐるから直ぐ家に帰るやうにとあります。今迄はそのまま反古箱に投げ入れて居りましたが、佛様の心がそのまま母の心であると感じ始めますと懐しいやら愧ぢ入るやらで、かうせすには居られないのです」と打ち明けられたさうであります。

囚人が鎖から放たれると云ふのちこれであります。「人生は牢獄である、人は囚人である」と申した哲人もあります。私共も身に持つた業の網で縛られきつて居ります。その私共の上に佛陀の誕生はましますのであります。

又某師は寺の長男に生れ、大学を出ると教諭師になられて十数年経られたのであります。お父さんが死なれて、檀家の方から是非自坊に帰るやうにと請求せられました。そこで今数年で恩給も貰へるからそれまで待つてくれるやうに、さうすれば門徒の方々にも重い負担をかけないで済むからと申出られ、やつと妥協が出来たのであります。その後無事に勤めを終り、寺に帰られたのであります。

らけ出して、そこに本願のおこり、念佛の御目あてを聞きとられ、焼け跡、狂人の奥様をかかへた慘怛たる心の中に佛陀の誕生を迎へられたのであります。これは近角常普先生から承り今尚ほ我が事として心の底に消えない教であります。

以上の例は主に逆縁の場合であります。順縁に惠まれ

婦人会、青年会、日曜学校と毎日忙しく働かれるので門徒の方も非常に歎ばれてゐたのであります。然し何時人生にどう云ふことが起るかわからぬもので、さうして居られるうちに奥様が氣狂ひになられ、然も火を見ると食事もそこそこのまま母の心であると感じ始めますと嬉しいやら愧ぢ入るやうに、さうすれば門徒の方々にも重い負担をかけないで済むからと申出られ、やつと妥協が出来たのであります。その後無事に勤めを終り、寺に帰られたのであります。

さうして居られるうちフト氣づかれたことは、「家内も長年連れ添うて来た、何時も内氣で何事にも逆ふといふことも無かつたのに、気が狂つたばかりに斯う云ふ人間になつたのである。それなのに赤鬼とくみのろふのは、自分自身が赤鬼であつた」といふことであります。さてそうなりますと、ちつとして居られないで求道会館に近角先生を訪ね、美しい理想は總て崩れ去り、自分自身の赤鬼をさ

た方々もあるのであります。然し人生そのものが苦界であります。到る處に愁歎の声が満ち、憂悲苦惱が続いてゐるのであります。さうであればこそ暗夜の燈炬、大海の船筏として佛陀の誕生は尽未来際かけて、ひかりとやすらぎを無量無邊に施されつつ、地に奇瑞をあらはされることであります。

昭和廿八年 四月聖日

大無量壽經講話 福島政雄

(大經の会坐に集ふ菩薩の徳の續き)

「光明あまねく無量の佛土を照し、一切の世界、六種に震動す」とあります。世界中のありとあらゆる国々、アメリカも、ソ連も、英國も佛國も、皆無量の佛土であります。觀無量寿經で「阿彌陀佛、ここを去ること遠からず」と、悩み苦しむ童提希夫人に釈尊は告げられました。これは同時に敗戦の悩みの多い私共に告げ給う釈尊の限りない慈悲の声であります。ここにめざめさせて頂いて、無量の佛土である世界万國を六種に震動せしめ、世界中に

よろこびの姿を現せしめる、かうした心持で私共日本人は生きねばなりません。さうなつてこそ敗戦の悔めさも深い意味を持つて来るのであります。アメリカに唯従ふのみの日本であつて見れば、太平洋の海の中に日本を沈めてしまひ度くなります。私は時時夢を見ます。日本に大火山が爆發して全部が太平洋に没して了ふぼうがよい。若し聖徳太子以来残された佛教で日本がよくなり独立出来ないで、いろいろな主義主張にうろつき廻るのであれば、さうなつた方がましだとさへ思ひます。

次に「總じて魔の世界を攝して、魔の宮殿を動かす、衆魔

懼怖し帰伏せざるは無し、邪網を罠裏し、諸見を消滅し、諸の塵勞を散じ、諸の欲望を穢す。法城を嚴護し、法門を開闢す云々」とあります。私はここでミルトンの失樂園を思ひ合せます。その筋を申しますと、惡魔が神の怒りにふれて或世界に閉ぢこめられる。そこで惡魔は復仇としてアダムトイブを誘惑する、といふことになつて居りますが、アダムトイブが菩提樹下でさとりをひらかれぬ間は、惡魔との戦ひであります。そしてさとりを開かれると、惡魔の世界が佛の胸の中に入つて了ふのであります。石の蓋に惡魔を閉ぢこめるではありません。そこに邪網が破れてくる、即ち間違つた見解が消え、アダムトイブは惡魔の世界を出でます。そこで惡魔が神の怒りにふれて或世界に閉ぢこめられる。そこで惡魔は復仇としてアダムトイブを誘惑する、といふことになつて居りますが、アダムトイブが菩提樹下でさとりをひらかれぬ間は、惡魔との戦ひであります。そしてさとりを開かれると、惡魔の世界が佛の胸の中に入つて了ふのであります。石の蓋に惡魔を閉ぢこめるではありません。そこに邪網が破れてくる、即ち間違つた見解が消え、アダムトイブは惡魔の世界を出でます。

「垢汚を洗濯し、清白を顯明す。佛法を光融し、正化を

「法を宣べんと欲して、欣笑を現す」

とあります。佛は衆生が必ずおさめ入れられるほほ笑み給ふ。これは一切衆生が必ずおさめ入れられるほほ笑みであります。法を宣べんとして欣笑を示すとあるのはこれであります。世間のあらゆる苦惱や悲劇を佛の御胸に入れて欣笑し給ふのであります。

ほんものになつて居りません。広島の学校に勤めて居ました頃、のちに内親王方の御教育係になられた藤井さんに、「君の笑ひは淋しい笑ひだ。西先生のはいかにもよい。西先生のやうになるまでは駄目である」とやつつけられたことがあります。これは今から二十年も前のことになります。昨年福岡で満七十才になられた藤井さんに会ひますと実に円満な顔になつて居られます。私の笑は今に駄目ですと申しましたら、失礼なことを申しましたとわびられました。「欣笑を示す」と大経にありますが、觀經では「即使微笑」とあり、禪家は「拈華微笑」と申して居りますが、これは何とも言へぬものと思つて居ります。

は微笑せられるのであります。人生の何ともならぬ、どうにも言ひやうのない苦惱の姿を、佛はよく知ろし召して、そしてほほ笑み給ふ。これは一切衆生が必ずおさめ入れられるほほ笑みであります。法を宣べんとして欣笑を示すとあるのはこれであります。世間のあらゆる苦惱や悲劇を佛の御胸に入れて欣笑し給ふのであります。

「諸の法薬を以て三苦を救療す」

とあります。苦々とは、苦苦、壞苦、行苦の三つであります。苦々とは今現に苦しいと感する苦、壞苦とは、今迄は樂しかつたものが壞れる苦であります。行苦とは、諸業の無常を歎く苦であります。これ等の苦を法薬をもつて癒して下さる。苦しみの底に限りない慈愛の心で、それにふれて、やはらけて下さるのであります。

近代のフランスのモリエールの喜劇でもなく、西洋ではゲ

エテのものであり、日本では芭蕉のものであらう」と書かれてありました。佛陀の欣笑とは悲劇をとほしての喜劇といふよりなほ深いものであります。續經に現はれる佛の微笑は、草提希夫人が、人生悲劇の底に落ちて悲泣雨涙し

てゐる、そこへ佛は光明を放つて現はれ給ふと、やがて草提希は爾陀の淨土を願うて來るのであります。その時佛

宣流す。國に入りて分衛し、諸の豐膳を獲、功德を貯へ、福田を示す」

とあります。即ち煩惱の垢を洗ひ、おのづから清らかな世界があらはれ、一切衆生が教化をうけて参るのであります。然も、佛陀や菩薩方はその國に入つて乞食をして歩かれてゐるのであります。自分は戦に勝つたぞ、城主にありますといふのではなく、乞食の姿であちらこちらに供養を願はれるのであります。そして供養されたものは、非常な功德になつて行くのであります。佛教の生きた世界は日本ではまづ聖德太子と光明皇后に見るのであります。太子は敬田院、悲田院、施藥院、療病院を天王寺に造られて、一切の社會的に苦しめる人々を救ひ、社會問題の解決にまで進められて、そこに功德が輝やいて居ります。佛や菩薩は乞食をして居られる姿のまんま社會問題の解決のところにまで進んで居られるのであります。これが福田を示すといふことであります。

るものでありまして、菩薩に記を授けるとは、私共に佛が記を授けて、やがて衆生済度が出来ることを、佛が申し渡して下さるのであります。私共凡夫を佛の位にひき上げて下さることを佛が約束して下さるのであります。

次に目立ちますのが「滅度を示現して、拯濟すること極り無し」とありますことであります。これは大切なことであります。佛が滅度を示現せられませぬと心が浮調子になります。本月の十九日が、私の母の三十三回忌になりますが、時々母を憶ひ起すのであります。親は子に先だつのが自然であると、頭では解りますが、何故母は先に死んだのかと、それは愚痴となつてつきまとひます。然し、母を失ひ、父を失ひ、子を失ひ、兄弟を失ふ、このことがなければ、私は浅薄に終るのであります。無常に遭うて始めて人生をすこし深く味ふことが出来るのであります。法華經の寿量品にも説かれてありますが、滅度は人生の悲しいことであるが、これでまた人生がすくはれて参るのであります。ソクラテスがあのやうにして毒杯を呑まされて死んだので、プラトンが非常に教へられてゐます。死んでおしゃる、死んで救ふ、かうした例は多いのであります。私の親も私にとつてさうであります。「父母のしきりに恋し雉子の声」とは芭蕉が親を失つてから何年目かに高野山でわき

すでに立す。如来の尊化は各能く宣布し、諸々の菩薩の為に大師と作り、甚深の禪慧を以て衆人を開導す」

とあります。菩薩は佛の住し給ふ所に住し給ひ、佛の建て給ふ願をたてて、佛の御教化をひろめて行かれるのであります。そして甚深の智慧をもつて衆人を開導すとありますところは、どういふ意味かと申しますと、心を諦めます。そして甚深の智慧をもつて衆人を開導すとありますところは、どういふ意味かと申しますと、心を諦めます。唯言葉だけで向うに行くばかりではないので、佛は黙つてゐられて自然にあたりの者にひびくといふところがあります。これはこの大経全体が大寂定に入られてゐるまゝ現はれてゐるので、その經文の通りになつてゐるのであります。佛の光顔巍々としてゐられる御姿、佛々相念してゐられる、これだけで大経の全体がこもつてゐるのであります。佛は黙つてゐられますが、ひかりかがやき、しづかに落着いてゐられるのであります。これを深く感ずれば大経全体の御教化を蒙ることが出来るのであります。即ち禪慧をもつて衆人を開導するといふことが中心になつて居ります。

次に、この菩薩方は諸佛を供養せられるのであります。それには種々の姿でこの世に現れて来られます。そして「幻化の法を曉了す」とあります、幻となつて現れて現れて世間の

出た声であります。親の死に遭うてそれによつて道を求める心持が深められる、かうしたことを感ずるのであります。かくて「功德を具足すること微妙にして量り難い」とはよいります。徳本とは南無阿彌陀佛、称名であります。かくて「功德を積まれるのであります」

○
「諸漏を消除して、衆の徳本を植う」とあります。漏とはよいります。私共が種々の世界で、菩薩達の働き、即ち佛のお働きは種々のものを幻の如く見せて導いて下さるのであります。私共が種々の縁に遭うてつまづき、苦しみ抜いて目をさまされて参るのであります。佛は種々の変化自在の姿を見せられるのですが、衆生が愚かでありますから、これを憐んで、かやうな働きがあらはれて下さるのであります。慢心などは尠しも見られないのであります。

「佛の所住は皆すでに住することを得、大聖の所立は皆

人々をさとらしめるのであります。即ち一切の相が皆幻であると知らされますと同時に、これが佛陀の御教化の無上の縁となる幻であると知らされますと「魔網を壊裂し、諸々の纏縛を解く」といふ風に、種々の煩惱のしばりから解かれて参るのであります。

かうして自分独りの覺を抜けて、空・無相・無願三昧を得たりと」なるので、これは佛法の中心であります。一切の相は空であります。空でありますから無碍の活動が出来るのであります。無相とは形がありながらも形にこびりつかず、無願とは願がありながら、それに執着しない三昧であります。相がありながらも執着せず、願を持ちながらそれに執着せず、それでるて相を現し願を建てるところに佛法の大重要なところがあります。これを体得して我々に及ぼして下さる、声聞・緣覚・菩薩の三つは、方便即眞実の姿を現されるのであります。

「諸根智慧、廣普寂定にして、深く菩薩の法藏に入り、佛華嚴三昧を得て、一切の經典を宣暢し、演説す」

とあります。これ等は皆、佛の大寂定三昧の中にひらく心であります。この大寂定三昧が華嚴三昧であります。華嚴經が大經におさまるところであります。

こうした深い智慧から衆生の閑かな者も、忙しい者も、

夫々に相應した法を説いて下さつて結局衆生に対しては、不謗之友となつて、一切の群生を自分の問題としてひきうけて、これを解脱せしめずにはおかねと願はれるので、これが佛の根本の願であり、菩薩も亦このやうな願を持たれるのであります。その姿は丁度孝行な子が親に仕へる如くにして、衆生に奉仕して下さるのであります。

以上の様な尊い徳が、大經の会坐に集る人々の上に成就されると説かれてゐるのであります。説聽同位といふことであります。聞く人々を必ず佛の位にまで引き上げねばおかぬといふ心であります。

私共は自分の力で夢にも佛の位に達するとは思へませんが、観音が「汝等をして菩薩の徳にまで引き上ける」と宣言して下さつてゐるのであります。ここに無上の使命を佛の御言葉に感ずるのであります。

以上菩薩の徳について、とびとびに申上げました。斯様な大士が、一時來会されてゐるのであります。その中に私共も入るのであります。これは歴史を越えた世界であると申せませう。

長州の國、六連島のおかる三十五の歎び歌
きいてみなんせ まことの道を 無理の教ぢやない
わいな。

まこときくのが おまへはいやか なにがのぞみで
あるぞいな。

領解すんだる その上からは ほかの思案はないわ
いな。
思案めされや命のうちに いのちおはれば あと思
案。

只でゆかる身を持ちながら おのが分別いろいろ
に。

おのが分別さつぱりやめて 獻陀の思案にまかさん
せ。
わしがこころは荒木の松よ つやのないのを御目當
よ。

願

生

抄

(遺稿)

清

水

凡

禿

来られる。始めの間は、それぞれにしつかりした人々なのに、その人々が格別に悩んでゐる私のところへ問題を持つて来る理由がわからなかつた。

しかし、おぼろけながら御聖教を味はして頂き、聖人が悩まれつゝ、そこに光を仰がれた御生活に、たまらない憧れを持つ自分の氣持を味うとき、ああ、ここだな!! と思つた。

冬に閉ざされてゐた世は、明け放たれて春になつた。鳥も花も、各自の天分を存分に發揮して、自由に活躍してゐる。それにも拘らず、何故に私は!! ほんとうにお愧びかしい、春の光を一杯に浴びながら、私(は)はつ俯してゐたのだ。さあ、大空をふり仰いで、心ゆくまでに胸一杯に春の光を浴びよう。

正覺の大音、響き十方に流る!

攝取の心光、常に我身を照し護る!

唯我独尊! 唯我独尊!

親鸞聖人は町から山に入られ、そして再び山から町へ出られた。聖人は「非僧非俗」と云はれた。また聖人は「弟

日々人生の種々相に触れるとき、いよいよみ教のおさとしが身に沁みて有難くなる。友が死んだ悩み、経済の悩み、家庭の悩み、何んだ、かだと、果てしがない、かうして私自身が悩んでゐる。その現に悩んでゐる私に、お友達が悩みを持つて訪ねて

味ふ程に有難い。
町のちまたにあつて輝くみ教、何ものにもとらはれぬ自由なみ教、確執のないなごやかなみ教、これこそ念佛の一
道である。

布団を干すために屋根に上つたら、やたらにラヂオの柱が目につく。この宇宙間にラヂオの電波が縦横無尽にみぎつてゐても、受信機がなければ聞くことが出来ない、またアンテナがなければ聞くことが出来ない。

この世に世尊が降誕あらせられ、正覚の大音ひびき十方に流るる、私共の耳をつんざくばかりに叫んで下さつても受信機である私が不完全であるため、雜音ばかりで、正真のみ声を聞き得なかつた、誠にお愧づかしいことだ。

○
去る二月二十七日、亡父の三周忌を嘗んだ。昨年までは広い座敷で、思ひのままに振舞つたのに、今年は六疊敷でささやかにませた。それでもまた結構間に合つた。沢山の人々が和やかに打興する様子は、どんなに考へても六疊敷の感じがしなかつた。

ああさうだ!!! いくら広い座敷でも「我」を主張し合ふ同志なら、額を打ち足を踏み尻を当てる。こんな狭い座敷ながらも、それが広く使へるのは、全くみのりの賜と感謝せずにはをられなかつた。

「あやまちを知つてする罪よりも、知らずにする罪ははるかに大きい」

佛に生かしめられる身の幸福を思ふ。世界一の不甲斐なき身なればこそ本願にあひまつて、世界第一の幸福者なる光榮を味はふ。

良寛さまの「おろかなる身こそなかなかうれしけれ、彌陀の誓にあふと思へば」のお歌がなつかしく拜まれる。

○
去る月、十幾年振りで上京し、初めてエスカレーターに乗つた。はじめのことだからなかなか乗つたままには居られず、足を踏み出したい仕方がない。しかし下手に足を踏み出せば怪戯をする。いかにしても、そのまま持つて行かれるより外に道がない。だが、自分の足で歩く癖はなかなか止まない。

それにつけても、大悲のみ胸に抱かれつゝも、なほおのがからひを捨てかねる自分のすがたがありありと見せつけられた。

○
久し振りに家に居て、母と妻と私の導師で、佛前にお勤めをあけさせて頂く。何が幸福だと云つても、これに増した幸福はあるまいと、しみじみ味はされた。母・妻、それに私と、一人一人が皆たへられぬ悩みを持

それは知らずにすることは際限がないからである。思ひをここに潜めた時、唯慚愧に堪へぬ。今迄、何よりの弁解の言葉として「知らなかつたから」と云つて、恬然として愧ぢずにあることが、まことにお愧づかしい。

○
「私は極悪深重の凡夫であるとは思ひますが、どうしても光を見出し得ません」とさる人のお尋ね、まことに一應御尤とうなづかれた。

○
一体、自分自身を見る場合、どうしても自分の都合のよい見方より外に出来ないその私が、いつの間にか、いくらかでも私は罪深くあさましいものであると見させて頂いたのは一体どうしてであろうか。

○
今、夜行列車で富士の麓野を通つたとしても、見る眼は持ちながら富士の秀峰を見ることは出来ない。光があればこそそれを眺めることが出来るのである。それなのに、私が極悪深重の凡夫と知れたことが、自分が憚巧だからさう見えたのだと、み光によつて見させて頂きながらも、そのみ光の中にあることは氣付かずに、外に向つて光を求めようとしてゐるために、光を見出しかねるのではあるまい。

か。

○
念佛なくして生き得られぬ身の不甲斐なさを思ふ時、念佛

つて居ればこそ、かうしてみ佛の御前にぬかづくことが出来るのだ。そしてお互に手を取り合ふことが出来るのだ。

○
何の問題も起らぬ時は、自分はみ教を聞かして頂いてゐるんだから、教を聞かずにある人達を、温く包んでゆかねばならぬのだなど、大それたことを考へてゐるくせに、いざ何か問題がまき起ると、忽ちその高い所からするすると降りて来て、相手の額と押し合ひを始める。額の押し合ひは、相手と同じ程度のところに居らなければ出来ないのである。それでもなほまだ自分は偉いんだと思つてゐる。全く情ないことだ。

○
平素通り、朝早く川辺に降りた。昨夜の雨で意外にも

大増水してゐるのに驚いた。
○
先度の雨降りには随分続いたが、大した増水もしなかつたが、と不審に思つたが、いや、いや、氣が付いてゐるとあの雨降りの前には、長い長い晴天続きで、土地が乾ききつてゐたのだから、いくら雨が降つても、地に浸み込んで増水する餘裕がなかつたのだ。私は、今この頃の日常生活において、かすかながらも大悲の程を有難く喜ばれるまでには、どんなにか大きな如來様の慈雨に潤されたことかと、深く省みさせられた。
死!!! こればかりは嚴肅な事実だ。それには誤間かしはきかない。
○
お葬式に出逢ふたびに、うかつた、ややもすればだらしのない自分が省みられ、わが師に逢つたやうな氣がする。まことに尊い教を身にかけて御教へ下さる、尊い御姿をまざるを得ない。

編集後記

佛陀の誕生を賑かにうれしくお祝び申

徳力が自然に映現してゐることを福島先生が御味ひ下され、私共にその信味をお頒ち下されたのであります。

昭和二十八年四月十五日 印刷
昭和二十八年四月十五日 発行

每月一画十五日發行

定價一冊金十七田（郵稅共
半 年 金百田（郵稅共
一年分 金二百田（郵稅共

名古屋市南区駄上町二ノ二八

花田正夫

增補古今圖書集成

自附入

名古屋市千種区千種町馬込二八

卷之三

卷之三

名古屋市南区馬上田二、二〇
一道金館

卷之三

振教口座番号
名古屋一

▲「大経講話」は第一回分を終り、いよいよ尊客が佛陀の光顔観るまとまします。今回までに集まる人々の上に、一切が佛の力で引き上げあがむとの弗陀の御病重しと承り、一入先生の信徳を仰ぎ、御依復をお念じ申すことであります。

一佛陀降誕の意義一は春を迎へました私の慶びと、来年を期し難い人生を省みこの花祭が一人一人の上に迎へる佛陀の誕生の慶びとして、ぢかに生命の通ふことの大切さを述べました。道元禪師は「如法に打坐すれば遍法界みな佛事をなす」といふ禪的さとりの境界を述べるらますが、「私如き愚鈍の劣機には如法などとは申せません。常に不如法の身でありますが、かうした罪障重く煩惱深き身の故に一入彌陀佛の大悲の深きを仰ぎ、念佛申させて頂くことであります。この頂く念佛の智光において佛陀の降誕が誕生いたまことのひかりを感じしめて下さるのであります。

▲「願生抄」は盛岡市の長岡高人氏の御尽力で、盛岡市を中心に行き、凡て居士有縁の方々に頒布されました。遺稿集であります。

其中本誌にすでに御照会申しました項を除き記載させて頂きました。居士の行くところ、見るもの聞くものに念佛念法念佛の徳音を聞きとられて居られますことは、居士の全生活が念佛にとろけて居られるからであります。何時もながら擦を正し、身の放逸解意を照し出されることであります。